

皇室典範義解

恭テ按スルニ皇室ノ典範アルハ益其ノ基礎ヲ鞏固ニシ尊嚴ヲ無窮ニ維持スルニ於テ缺クヘカラサルノ憲章ナリ

祖宗國ヲ肇メ一系相承ケ天壤ト與ニ無窮ニ垂ル此レ蓋言說ヲ假ラスシテ既ニ一定ノ模範アリ以テ不易ノ規準タルニ因ルニ非サルハナシ今人文漸ク進ミ遵由ノ路必憲章ニ依ル而シテ皇室典範ノ成ルハ實ニ祖宗ノ遺意ヲ明徴ニシテ子孫ノ爲ニ永遠ノ銘典ヲ貽ス所以ナリ

皇室典範ハ皇室自ラ其ノ家法ヲ條定スル者ナリ故ニ公式ニ依リ之ヲ臣民ニ公布スル者ニ非ス而シテ將來已ムヲ得サルノ必要ニ由リ其ノ條章ヲ更定スルコトアルモ亦帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要セサルナリ蓋皇室ノ家法ハ祖宗ニ承ケ子孫ニ傳フ既ニ君主ノ

任意ニ制作スル所ニ非ス又臣民ノ敢テ干涉スル所ニ非サルナリ

第一章 皇位繼承

第一條 大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男

子之ヲ繼承ス

恭テ按スルニ皇位ノ繼承ハ祖宗以來既ニ明訓アリ和氣清麻呂還
奏ノ言ニ曰、我國家開闢以來、君臣分定矣、以臣爲君未之有也、天之日
嗣、必立皇緒ト

皇統ハ男系ニ限り女系ノ所出ニ及ハサルハ、皇家ノ成法ナリ上代
獨女系ヲ取ラサルノミナラス神武天皇ヨリ崇峻天皇ニ至ルマテ
三十二世曾テ女帝ヲ立ツルノ例アラス故ニ神功皇后ハ國ニ當ル
コト六十九年終ニ攝位ヲ以テ終ヘタマヘリ飯豐青尊政ヲ攝シ清

寧天皇ノ後ヲ承ケシモ亦未タ皇位ニ即キタマハス清寧天皇崩シテ皇子ナシ亦近親ノ皇族男ナシ而シテ皇妹春日大娘アリ然ルニ皇妹位ニ即カスシテ群臣從祖履中天皇ノ孫顯宗天皇ヲ推奉ス是レ以テ上代既ニ不文ノ常典アリテ易フヘカラサルノ家法ヲ成シタルコトヲ見ルヘシ其ノ後推古天皇以來皇后皇女即位ノ例ナキニ非サルモ當時ノ事情ヲ推原スルニ一時國ニ當リ幼帝ノ歳長スルヲ待チテ位ヲ傳ヘタマハムトスルノ權宜ニ外ナラス之ヲ要スルニ祖宗ノ常憲ニ非ス而シテ終ニ後世ノ模範ト爲スヘカラサルナリ本條皇位ノ繼承ヲ以テ男系ノ男子ニ限り而シテ又第二十一條ニ於テ皇后皇女ノ攝政ヲ掲クル者ハ蓋皆先王ノ遺意ヲ紹述スル者ニシテ苟モ新例ヲ創ムルニ非サルナリ

祖宗ノ皇統トハ一系ノ正統ヲ承クル皇胤ヲ謂フ而シテ和氣清麻

呂ノ所謂皇緒ナル者ト其ノ解義ヲ同クスル者ナリ皇統ニシテ皇位ヲ繼クハ必一系ニ限ル而シテ二三ニ分割スヘカラス天智天皇ノ言ニ曰天無雙日國無二王ト故ニ後深草天皇以來數世ノ間兩統互ニ代リ終ニ南北二朝アルヲ致シ、ハ皇家ノ變運ニシテ祖宗典憲ノ存スル所ニ非サルナリ

以上本條ノ意義ヲ約說スルニ祖宗以來皇祚繼承ノ大義炳焉トシテ日星ノ如ク萬世ニ亘リテ易フヘカラサル者蓋左ノ三大則トス

第一 皇祚ヲ踐ムハ皇胤ニ限ル

第二 皇祚ヲ踐ムハ男系ニ限ル

第三 皇祚ハ一系ニシテ分裂スヘカラス

第二條

皇位ハ皇長子ニ傳フ

第三條

皇長子在ラサルトキハ皇長孫ニ傳フ皇長子

及其ノ子孫皆在ヲサルトキハ皇次子及其ノ子孫ニ傳フ以下皆之ニ例ス

恭テ按スルニ菟道稚郎子ノ言ニ曰、昆上而季下、古今之常典ト葛野王持統天皇ニ進奏スルノ言ニ曰、我國家爲法也、神代以來、子孫相承、以襲天位、若兄弟相及、則亂從此興ト此レ乃祖宗以來子孫直系相傳ヘ長幼序ニ從フヲ以テ天位繼承ノ正法トス而シテ其ノ兄弟相傳フルハ反正天皇ノ履中天皇ニ於ケル允恭天皇ノ反正天皇ニ於ケルヨリ始マリ皆已ムヲ得サルニ出テ其ノ正ニ非サルナリ第二第三條繼承ノ法ヲ一定シテ後王ノ爲ニ常典ヲ貽シ敢テ權宜左右スルコトヲ容サ、ルハ蓋祖宗ノ遺範ヲ恪ミ永ク亂萌ヲ後裔ニ絶ツ所以ナリ凡ソ子孫ト云ヘルハ曾孫以下皆其ノ内ニ在リ古典ニ天神之孫也トアルハ(日本書紀卷二)天祖ノ裔孫ヲ謂ヘルナリ又五世孫七世孫トアリ(同書卷十)是レ姓氏錄ノ慣用スル所ナリ長子ノ子

孫ハ次子ニ先ツハ宗統ヲ重ニスルナリ長子ノ子孫在ラサルニ至テ始メテ次子ニ移ル次子ノ子孫ノ第三子以下ニ於ケルモ亦同例トス

次條ニ皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ルト謂フトキハ第二第三條ハ嫡子孫ニ就テ其ノ長ヲ擇フヲ謂フ而シテ嫡子孫皆在ラサルトキハ庶子孫ニ於テ其ノ長ヲ擇フモ亦本法ニ依ルコト知ルヘキナリ

第四條 皇子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ嫡出ヲ先ニス皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ル

恭テ按スルニ祖宗ノ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニスルハ神武天皇庶長子手研耳命ヲ措テ綏靖天皇ヲ立テタマフニ始マル是ヲ繼嗣ノ常典

トス但シ皇緒萬世一日モ曠クスヘカラス故ニ既ニ嫡出ナキトキ
ハ庶出亦位ヲ繼クコトヲ得セシム蓋清寧天皇崩シ皇嗣ナシ履中
天皇ノ孫顯宗天皇位ヲ繼ク面シテ天皇ハ實ニ其ノ姊飯豊青尊兄
仁賢天皇ト俱ニ履中天皇ノ庶出磐坂市邊押羽皇子ノ子ナリ清寧天皇
ノ妹春日大娘アリ亦庶出ナリ武烈天皇崩シテ皇嗣ナシ應神天皇五世ノ孫繼體
天皇ヲ迎ヘ位ニ即ク而シテ天皇ハ實ニ應神天皇ノ庶出稚淳毛二
派皇子ノ後ナリ此ノ時ニ當テ皇統絶エサルコト綫ノ如シ若庶系
ヲ立ツルコトナカリセハ當時既ニ言フヘカラサルノ事アラム我
カ國ノ庶出ヲ絶タサルハ實ニ已ムヲ得サルニ出ル者ナリ
皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ルトハ長子及次子以下及其ノ子孫
ニ通シテ之ヲ謂フナリ故ニ皇庶長子ハ皇嫡幼子孫ニ先タツコト
ヲ得ス長系ノ庶皇孫ハ次系ノ皇嫡子孫ニ先タツコトヲ得サルナ

リ

問皇庶子ノ子嫡出ナルトキハ之ヲ嫡皇孫トスルコトヲ得ヘキカ
答皇庶子ノ子孫ハ即チ庶流ナリ故ニ皇庶子ノ嫡出ノ子ハ其ノ庶
出ノ兄弟ニ先タツヘキモ皇嫡子孫ニ先タツコトヲ得ス

第五條 皇子孫皆在ラサルトキハ皇兄弟及其ノ子孫
ニ傳フ

第六條 皇兄弟及其ノ子孫皆在ラサルトキハ皇伯叔
父及其ノ子孫ニ傳フ

第七條 皇伯叔父及其ノ子孫皆在ラサルトキハ其ノ
以上ニ於テ最近親ノ皇族ニ傳フ

恭テ按スルニ第五第六第七條ハ皇子孫在ラサルニ當リ繼嗣ヲ定
ムルニ最近親ヲ以テスルコトヲ示スナリ皇子孫ハ現在ノ天皇ニ

屬スル至親ノ宗系タリ皇子孫ノ嫡庶俱ニ在ラサルトキハ皇兄弟ヲ以テ最近親トス故ニ繼承ノ權皇兄弟ノ中ノ一ニ移ル其ノ現在ノ天皇ト同父ナレハナリ皇兄又ハ皇弟ノ子及孫ハ皇兄又ハ皇弟ノ系統ニ屬スル者ナリ皇兄弟及其ノ子孫ノ嫡庶俱ニ在ラサルトキハ此ニ次キ皇伯叔ヲ最近親トス故ニ繼承ノ權皇伯叔ノ中ノ一ニ移ル其ノ現在ノ天皇ノ父ト同父ナレハナリ皇伯又ハ皇叔ノ子及孫ハ皇伯又ハ皇叔ノ系統ニ屬スル者ナリ皇伯叔以上最近親ノ皇族ト謂ヘルハ皇大伯叔及其ノ以上皆之ニ準スルナリ一系ノ下ハ尊卑相承ケ而シテ宗系盡キテ支系ニ及ヒ近系盡キテ遠系ニ及フ蓋繼承ノ疑義ヲ將來ニ絶チ皇緒ノ慶福ヲ永遠ニ保タムトスルナリ

第八條 皇兄弟以上ハ同等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ庶ヲ

後ニシ長ヲ先ニシ幼ヲ後ニス

恭テ按スルニ皇兄弟一等トシ皇伯叔又一等トシ皇大伯叔又一等トス皇兄弟ノ等内ニ於ケルハ其ノ嫡長ヲ擇ヒ嫡ナキトキハ庶出ノ中ニ就テ其ノ長ヲ擇フ皇兄弟ノ子孫ニ於ケルハ總テ皇子孫ノ例ニ同シ皇伯叔ノ等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ長ヲ先ニスルハ其ノ例皇兄弟ノ等ニ同シ其ノ皇大伯叔ノ等ニ於ケルモ亦同シ蓋皇子孫ノ庶出ハ皇兄弟ノ嫡出ニ先ニスルハ皇家其ノ宗系ヲ重ニスルノ例典ニシテ天皇ノ下尊卑相承ケ嫡庶俱ニ盡クルニ非サレハ支系ニ移ルコトナシ本條推シテ之ヲ各等ニ及ホシ一等コトニ嫡長ヲ先ニシ庶幼ヲ後ニシ嫡庶俱ニ盡クル毎ニ其ノ等ヲ上ス皆其ノ例ヲ同クス故ニ同等内ニ於テト謂ヘルナリ

嫡ヲ先ニストハ嫡出ヲ先ニシ嫡系ヲ先ニスルヲ謂フ長ヲ先ニス

トハ長子ヲ先ニシ長系ヲ先ニスルヲ謂フ故ニ皇嫡兄弟及其ノ子孫ハ皇庶兄弟ニ先タチ皇嫡兄弟ノ中ニ就テハ皇長兄及其ノ子孫ハ皇幼弟ニ先タチ皇嫡兄弟ナキトキハ皇庶兄及其ノ子孫ハ又皇庶弟ニ先タツヘキナリ

第九條 皇嗣精神若ハ身體ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ前數條ニ依リ繼承ノ順序ヲ換フルコトヲ得

恭テ按スルニ皇嗣ハ先王憲典ノ存スル所ニ循ヒ大統ヲ繼キ神器ヲ傳フルノ位ニ居ル而シテ人主ノ任意ニ左右スルコトヲ得ル所ニ非ス故ニ繼承ノ順序ヲ換フルハ必精神若ハ身體ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アリテ神器ノ重キヲ承クルニ堪ヘサルトキニ限り而シテ又必皇族會議及樞密顧問ニ諮詢スルヲ經テ始メテ

決行スルコトヲ得若本條ノ定ムル所ニ依ラスシテ繼嗣ヲ易ヘ置クハ典範ノ認メサル所タリ而シテ一時ノ過失ノ如キハ以テ重大ノ事故ト爲スノ類ニ非サルナリ

第二章 踐祚即位

第十條 天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

恭テ接スルニ神祖以來鏡、劍、璽三種ノ神器ヲ以テ皇位ノ御守ト爲シタマヒ歷代即位ノ時ハ必神器ヲ承クルヲ以テ例トセラレタリ
 允恭天皇元年紀ニ大中姬命、謂群卿曰、皇子(允恭天皇)將聽群臣之請、今當上天皇璽符、於是群臣大喜、即日捧天皇之璽符再拜上焉、乃即位

位日本書紀ト云ヘル是レナリ

上古ハ踐祚即チ即位ニシテ兩事ニ非ス令義解ニ天皇即位謂之踐
祚、祚位也トアル是レナリ此ノ時ヨリ踐祚ノ日ニ神器ヲ奉ラレタ
リ蓋天子之位、一日不可曠歷世ノ宣命ニ見故ニ繼體天皇群臣ノ迎
フル所トナリ未タ帝位ヲ踐ミタマハス而シテ史臣既ニ天皇移樟
葉宮ト書シタリ藤原兼實玉海然ルニ天智天皇重キヲ承ケテ仍皇太子ト
稱ヘ七年ノ後ニ即位ノ禮ヲ行ヒタマヘリ是レ踐祚ト即位ト兩様
ノ區別ヲ爲シタルノ初ナリ其ノ後歷代踐祚ノ後數年ニシテ即位
ノ禮ヲ行ハレタルコトアリシモ神器ハ必踐祚ノ時ニ奉ラル、コ
ト上古ト異ナルコトナシ本條ハ皇位ノ一日モ曠闕スヘカラサル
ヲ示シ及神器相承ノ大義ヲ掲ケ以テ舊章ヲ昭明ニス若乃繼承ノ
大義ハ踐祚ノ儀文ノ有無ヲ問ハサルハ固ヨリ本條ノ精神ナリ
再ヒ恭テ按スルニ神武天皇ヨリ舒明天皇ニ至ル迄三十四世嘗テ

讓位ノ事アラス讓位ノ例ノ皇極天皇ニ始マリシハ蓋女帝假攝ヨ
 リ來ル者ナリ日ニ繼體天皇ノ安閑天皇ニ讓位ノ始トナスヘカラス聖武天
 皇光仁天皇ニ至テ遂ニ定例ヲ爲セリ此ヲ世變ノ一トス其ノ後權
 臣ノ強迫ニ因リ兩統互立ヲ例トスルノ事アルニ至ル而シテ南北
 朝ノ亂亦此ニ源因セリ本條ニ踐祚ヲ以テ先帝崩御ノ後ニ即チ行
 ハル、者ト定メタルハ上代ノ恒典ニ因リ中古以來讓位ノ慣例ヲ
 改ムル者ナリ

第十一條 即位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

恭テ按スルニ天智天皇稱制ノ後更ニ即位ノ禮ヲ行ハレシ以來歷
 代相因ルノ大典トナレリ文武天皇紀ニ載セタル即位ノ詔ニ集侍
 皇子等王臣百官人等天下公民諸聞食ト詔ルトアルハ蓋上代ノ遺
 例ニシテ皇族以下百官人民ヲ集メテ詔命ヲ天下ニ布キタマヒシ

ナリ即位ノ古禮ノ史乘ニ見エタルハ持統天皇紀ニ物部麻呂朝臣
樹大盾神祇伯中臣大島朝臣讀天神壽詞畢忌部宿禰色夫知奉上神
璽劍鏡於皇后皇后卽天皇位公卿百僚羅列匝拜而拍手焉トアルヲ
始トス此ノ前孝德紀ニ見エ即位ノ式ハ太極殿ニテ行ハレ冕服ヲ
服シ高御座ニ即キタマフ貞觀儀式冷泉天皇御惱ニ由リ紫宸殿ニテ行
ハル其ノ後太極殿災廢シテ或ハ太政官廳ニテ行ハレ或ハ南殿紫
殿ニテ行ハレタリ武門政ヲ專ニスルノ時用度供給セスシテ踐祚
ノ後數年ヲ經ト雖猶大禮ヲ行ハレサルコトアリシ維新ノ後明治
元年八月二十七日即位ノ禮ヲ舉行セラレ臣民再ヒ祖宗ノ遺典ヲ
仰望スルコトヲ得タリ十三年車駕京都ニ駐マル舊都ノ荒廢ヲ嘆
惜シタマヒ後ノ大禮ヲ行フ者ハ宜ク此ノ地ニ於テスヘシトノ旨
アリ勅シテ宮闕ヲ修理セシメタマヘリ本條ニ京都ニ於テ即位ノ

禮及大嘗祭ヲ行フコトヲ定ムルハ大禮ヲ重シ遺訓ヲ恪ミ又本
ヲ忘レサルノ意ヲ明ニスルナリ

大嘗ノ祭ハ神武天皇元年以來歷代相因テ大典トハセラレタリ蓋
天皇位ニ即キ天祖及天神地祇ヲ請饗セラル、ノ禮ニシテ一世ニ
一タヒ行ハル、者ナリ天武天皇以來年毎ニ行フヲ新嘗ト王政ノ
中コロ衰ヘタルトキ此ノ儀久シク廢絶シタリシニ後土御門天皇
以來ニ百二十
二年ノ間廢止シ東山天皇ニ至リ再ヒ行ハレ中御門天皇
以來五十一年ノ間行ハレス櫻町天皇ニ至テ舉行セラレ明治四年
十一月詔アリテ舉行セラレタリ

第十二條 踐祚ノ後元號ヲ建テ一世ノ間ニ再ヒ改メ
サルコト明治元年ノ定制ニ從フ

恭テ按スルニ孝德天皇紀ニ改天豐財重日足姬天皇四年爲大化元
年トアルハ是レ建元ノ始ニシテ歷代ノ例制トナレリシモ其ノ後

陰陽占トノ説ニ依リ一世ノ間屢年號ヲ改メ徒ニ史乘ノ煩キヲ爲
スニ至レリ明治元年九月八日ノ布告ニ云今般御即位御大禮被爲
濟先例之通被爲改年號候就テハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有
之候へ共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年
旨被仰出候事ト此レ本條ノ依ル所ノ令典ナリ

第三章 成年后立太子

第十三條 天皇及皇太子皇太孫ハ滿十八年ヲ以テ成
年トス

恭テ按スルニ中古以來天皇元服ノ制ヲ設ケラル大抵十一歳ヨリ
十五歳ニ至リ元服ヲ行ハレタリ明治九年民法上ノ丁年ヲ定メテ
滿二十年トス本條天皇及皇太子皇太孫ノ爲ニ成年ヲ定メテ十八

年トシタルハ天皇及皇嗣ハ神器ノ重ニ當リ尋常通法ノ拘ル所ニ非サレハナリ

第十四條 前條ノ外ノ皇族ハ滿二十年ヲ以テ成年ト

ス

恭テ按スルニ天皇及皇嗣ノ成年ヲ以テ之ヲ他ノ皇族ニ及ホサルハ前條特例ノ限ニ在ラサルナリ

第十五條 儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス皇太子在ラサルトキハ儲嗣タル皇孫ヲ皇太孫トス

恭テ按スルニ皇太子古ハヒツギノミコト稱フ神武天皇紀ニ立皇子神渟名川耳尊爲皇太子ト此レ乃史臣皇太子ノ稱ヲ用井日嗣ノ御子ノ名ニ當テタル者ニシテ中古以來ハ取テ典禮トセラレタリ其ノ皇子ニ非スシテ入テ皇嗣トナルモ史臣亦皇太子ヲ以テ稱フ

成務天皇日本武尊ノ第二子尼仲彦尊從姪孫ノ天皇ニシテ族叔祖
ヲ立テ、皇太子ト爲ス即チ皇姪ナリ
ヲ立ツルニ至テモ亦太子ト呼ヘリ孝謙天皇ノ淳仁天皇但シ或ハ
立太子ヲ宣行スルアリ或ハ宣行セサルアリテ其ノ實一定ノ成例
アラス皇弟ヲ立ツルニ至テハ或ハ儲君ト稱ヘ反正天皇ノ履中或
ハ太子ト稱ヘ後三條天皇ノ後冷或ハ太弟ト稱フ嵯峨淳和村上圓融後朱雀順德龜
山亦未タ畫一ナラス今既ニ皇位繼承ノ法ヲ定メ明文ノ掲クル所
ト爲ストキハ立太子立太孫ノ外支系ヨリ入テ大統ヲ承クルノ皇
嗣ハ立坊ノ儀文ニ依ルコトヲ須井ス而シテ皇太子皇太孫ノ名稱
ハ皇子皇孫ニ限ルヘキナリ

第十六條 皇后皇太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ

以テ之ヲ公布ス

恭テ按スルニ立后ノ事ハ神武天皇以來歷世ノ帝紀ニ載セタリ而

シテ立后ノ詔ハ始メテ聖武天皇紀ニ見ユ其ノ宣命ニ謂ヘルコト
 アリ「天下ノ政ニ於キテ獨知ルヘキ物ニアラス必モ後ノ政アルヘ
 シ此ハ事立ツニアラス天ニ日月アル如ト地ニ山川アル如ト並坐
 テ在ルヘシト云フコトハ汝等王臣等明ニ見知レルコトナリ云々」
 此ノ詔命ハ坤位册立ノ義ヲ表スルニ於テ事理昭明更ニ贊辭ヲ須
 井サル者ナリ本條ニ立后ノ大禮必詔書ヲ以テ公布スルコトヲ定
 ムルハ先王ノ典故ヲ重シ且中古以來中宮准后ノ設アリ從テ册
 立ノ儀ヲ缺クコトアルハ將來ニ依ルヘキノ模範ト爲スヘカラサ
 ルコトヲ明ニスルナリ
 立太子ノ詔ハ始メテ光仁天皇紀ニ見ユ貞觀儀式ニ立皇太宣制ノ
 式ヲ載ス曰「法ノマヽニ有ルヘキ政トシテ某ノ親王ヲ立テ、皇太
 子ト定メ賜フ故此ノ狀ヲ悟リテ百官人等仕奉ト詔ル云々」ト蓋皇

太子皇太孫ハ祖宗ノ正統ヲ承ケ皇位ヲ繼嗣セムトス故ニ皇嗣ノ位置ハ立坊ノ儀ニ由リ始メテ定マルニ非ス而シテ立坊ノ儀ハ此ニ由テ以テ臣民ノ瞻望ヲ饜カシムル者ナリ

第四章 敬稱

第十七條 天皇太皇太后皇太后皇后ノ敬稱ハ陛下トス

恭テ按スルニ陛下ハ臣下ヨリ天子ニ敷奏スルトキノ敬稱ナリ本條ニ陛下ノ敬稱ヲ以テ通シテ至尊ニ對スルノ稱謂トシ而シテ敷奏陛見ノ辭ニ限ラサルハ舊典ヲ敷衍シテ之ヲ内外ニ廣ムルナリ大寶ノ令ニ三后ニ上啓スルハ殿下ト稱フ本條ニ太皇太后皇太后皇后皆陛下ト稱フルハ嫡后國母ハ至尊ニ齊匹シ至尊ト俱ニ臣民ノ至隆ナル敬禮ヲ受クヘケレハナリ但シ君位ハ一アリテ二ナシ

皇后ハ固ヨリ佗ノ皇族ト均ク人臣ノ列ニ居ル而シテ大寶ノ制ト
其ノ稱ヲ殊ニシテ仍其ノ實ヲ同クスルコトヲ失ハサルナリ

第十八條 皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王

妃内親王王王妃女王ノ敬稱ハ殿下トス

恭テ按スルニ本條ハ舊制皇太子ニ於テ殿下ト稱フルノ例ニ因リ
推シテ之ヲ皇族ニ及ホスナリ

第五章 攝政

第十九條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ攝政ヲ置
ク

天皇久キニ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスルコト
能ハサルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ攝

政ヲ置ク

恭テ按スルニ攝政ハ以テ皇室避クヘカラサルノ變局ヲ救濟シ一
ハ皇統ノ常久ヲ保持シニハ大政ノ便宜ヲ疏通シ兩ツナカラ失墜
ノ患ヲ免ル、所以ナリ攝政ハ天皇ノ天職ヲ攝行シ一切ノ大政及
皇室ノ内事皆天皇ニ代リ之ヲ總攬ス而シテ至尊ノ名位ニ居ラサ
ルナリ之ヲ古今及各國ニ參照スルニ攝政ノ事例一ニ非ス或ハ君
祚ヲ假攝スルアリ飯豐青尊ノ攝政ニ居タ或ハ人臣ヲ以テ大政ヲ
攝行スルアリ殷ノ伊尹、我カ藤原良房是レナリ或ハ共同攝政ヲ組織シ輔臣ヲ以テ
攝政體ト爲スアリ周ノ幽王ノ後ノ共和及巴威爾索遜瓦敦而シテ
堡等ノ國ニ於ケル共同攝政是レナリ國家ノ危機亦往々攝政ノ時ニ起ル者少カラス本條ハ攝政ヲ認メ
テ攝位ヲ認メス以テ大統領ヲ嚴慎ニスルナリ而シテ人臣ノ攝政ヲ
許サ、ルハ次條ニ於テ之ヲ見ル

天皇久キニ亘ルノ故障トハ重患彌留歲月ノ久キニ亘リ醫治ノ望
ナク又ハ其ノ他ノ事故ニ因リ天職曠闕ナルヲ謂フ而シテ其ノ大
政ヲ親ラスルニ堪ヘサルニ至テ始メテ攝政ヲ置クノ事アルヘシ
若天皇一時ノ疾病違和又ハ國疆ノ外ニ在スノ故ヲ以テ皇太子皇
太孫ニ命シ代理監國セシムルカ如キハ大寶令以令代勅ノ制ニ依
リ別ニ攝政ヲ置カス歐洲各國亦此例ヲ同クス攝政ヲ置クハ已ムヲ得サルノ
必要ニ由ル故ニ天皇既ニ成年ニ達シ又ハ違豫常ニ復シタマフト
キハ攝政ヲ罷ムルコト別ニ明言ヲ待タスシテ知ルヘキナリ
次項皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經ルハ何ソ乎蓋事體時アリテ或
ハ疑似ニ涉ルコトアルヲ免レス故ニ典範ニ於テ其ノ議ヲ經ルコ
トヲ掲ケテ要件ト爲スナリ其ノ諮詢ト謂ハスシテ議ヲ經ト謂ヘ
ルハ何ソ乎天皇或ハ諮詢ノ命ヲ親ラスルコト能ハサルノ情況ニ

在ルモ皇族會議樞密顧問ハ皇室ノ大事ニ於テ推諉傍觀スヘキニ非ス進テ其ノ誠ヲ致シ以テ宮禁ノ大計ヲ定ムヘキナリ其ノ或ハ皇族會議ニ由テ發議シ樞密顧問ノ審議ニ付スルト或ハ樞密顧問ノ發議ニ由リ皇族會議ノ協同ヲ求ムルト俱ニ時宜ニ從フナリ

第二十條 攝政ハ成年ニ達シタル皇太子又ハ皇太孫之ニ任ス

第二十一條 皇太子皇太孫在ラサルカ又ハ未タ成年ニ達セサルトキハ左ノ順序ニ依リ攝政ニ任ス

第一 親王及王

第二 皇后

第三 皇太后

第四 太皇太后

第五 内親王及女王

恭テ按スルニ推古天皇紀ニ立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政
 以萬機、悉委焉、是ヲ皇太子攝政ノ例トス、仲哀天皇崩シ、應神天皇胎
 中ニ在リ、皇母神功皇后攝政ス、是ヲ皇后攝政ノ例トス、顯宗天皇紀
 ニ白髮天皇崩、皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、由是、天皇、姉飯豐
 青皇女臨朝秉政、是ヲ皇女攝政ノ例トス、上世攝政ニ當ル者ハ必皇
 族ニ限ル、中古以來始メテ大臣攝政ノ例アリ、而シテ要スルニ一時
 ノ便宜ニシテ以テ後世ノ模範ト爲スヘカラス、本條攝政ノ制ヲ定
 メ皇族ニ限り、人臣ニ及ホサ、ルハ蓋大政ノ繫ル所ヲ嚴ニシ、神器
 ノ重キヲ慎ムナリ

第一條ニ皇位ヲ繼承スルハ男系ノ男子ニ限ルコトヲ掲ケタリ、而
 シテ本條皇后皇女ニ攝政ノ權ヲ付與スルハ蓋上古以來ノ慣例ニ

遵ヒ且攝政其ノ人ヲ得ルノ道ヲ廣クシ人臣ニ下及スルノ漸ヲ杜
カムトナリ

第二十條ニ謂ヘル皇太子皇太孫ノ成年ハ第十三條ニ依ル其ノ他
親王以下普通ノ成年ニ達セサルハ仍攝政ニ任スヘカラサルコト
知ルヘキナリ

第二十二條 皇族男子ノ攝政ニ任スルハ皇位繼承ノ
順序ニ從フ其ノ女子ニ於ケルモ亦之ニ準ス

恭テ按スルニ上代皇太子攝政ノ任ニ當ルノ事アルハ是レ既ニ攝
政ノ重任ト皇位繼承ノ順序トヲ以テ併セテ一條ノ軌轍ト爲スノ
義例ヲ始ムル者ナリ蓋各國古史ノ載スル所ニ參考スルニ攝政ハ
長年德器ノ人ヲ擇テ之ニ任ス而シテ繼續ノ變多クハ此ニ因テ起
ル本條ニ攝政ノ任ヲ以テ專ラ皇位繼承ノ順序ニ從ハシムルハ宗

統ノ倫序ヲ以テ併セテ攝政ニ及ホシ危疑ノ門ヲ將來ニ絶ツ所以ナリ故ニ第十九條ニ依リ攝政ヲ置クヲ要スルノ時アルニ際リテハ皇位繼承ノ順次ニ當レル皇族ハ群臣ノ推奉アルヲ待タスシテ進テ攝政ニ任スルノ權利及義務ヲ有スヘキコト皇太子ノ大位ヲ繼クニ於ケルト異ナルコト無キナリ

皇族女子ハ皇位繼承ノ權ナシ第一條但シ攝政ニ任スルノ順序ハ皇族男子ノ繼承ノ順序ニ比準シテ先後ヲ定ム

第二十三條 皇族女子ノ攝政ニ任スルハ其ノ配偶アラサル者ニ限ル

恭テ按スルニ上代既ニ嫁スルノ皇族女子攝政ニ任スルノ例アルコトナシ蓋其ノ夫ニ從フノ義ト並行スヘカラサレハナリ而シテ異姓ニ嫁スルノ王女ハ王族ニ非サルトキハ從テ又攝政ノ權アラ

サルヘキナリ

但シ其ノ皇族ニ嫁スルノ後、夫ヲ喪ヒ寡居スル者及異姓ニ嫁スルモ離婚シテ本族ニ復シ又ハ孀婦トナルノ後、其ノ夫ノ家ヲ離レ本族ニ復スル者ハ仍攝政タルノ權ヲ失ハサルヘシ故ニ本條ハ未ダ嫁セサルノ皇女ト謂ハスシテ配偶アラサル者ト謂フ

第二十四條 最近親ノ皇族未タ成年ニ達セサルカ又

ハ其ノ他ノ事故ニ由リ他ノ皇族攝政ニ任シタルトキハ後來最近親ノ皇族成年ニ達シ又ハ其ノ事故既ニ除クト雖皇太子及皇太孫ニ對スルノ外其ノ任ヲ讓ルコトナシ

恭テ按スルニ本條ハ明文ヲ以テ豫メ疑義ヲ判スルナリ皇太子皇太孫ハ大統ノ宗系ニ居ル故ニ已ニ成年ニ達シ又ハ事故已ニ除ク

トキハ他ノ皇族及皇后以下攝政ニ當レル者總テ其ノ任ヲ讓ラサルコトヲ得ス但シ甲ノ皇族ト乙ノ皇族トノ間ニシテ單ニ親疎ノ別アル者ニ在テハ一タヒ攝政ニ當レルノ甲ハ更ニ其ノ任ヲ乙ニ讓ルコトヲ要セス又任意ニ之ヲ讓ルコトヲ得サル者トス

第二十五條 攝政又ハ攝政タルヘキ者精神若ハ身體

ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ其ノ順序ヲ換フルコトヲ得

恭テ按スルニ攝政又ハ攝政タルヘキ者重患又ハ重故アルニ因リ其ノ順序ヲ換フルノ必要ナル時機アルニ當テハ皇族會議及樞密顧問ハ和衷同心以テ其ノ誠ヲ致シ大計ヲ定メサルコトヲ得ス本條ニ重患ト謂テ不治ノ重患ト謂ハス第九條ト文ヲ異ニスルハ彼此ノ間ニ固ヨリ輕重ノ別アレハナリ